



👁️👁️ みどころ

台北の小さな町菁桐 (チントン) で展開される、台湾のスター陳柏霖 (チェン・ポーリン) と「小章子怡」と呼ばれる正統派美女童瑤 (トン・ヤオ) の恋愛劇は、生活感とともに叙情がたっぷり。

ロミオとジュリエットは悲劇的結論がミエミエだが、大きく立場の違う男女の恋の結末は？そんな興味とともに、地盤沈下する一方の日本の地方都市再生の処方箋も本作から。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ホントに台北に雪が降るの？■□■

本作の原題は『台北飄雪』、英題は『Snowfall in Taipei』、そして邦題は『台北に舞う雪』。これらはいずれも「台北に雪が降る」という意味だが、ホントに台北に雪が降るの？

台湾は北から順に台北・台中・台南そして高雄という大都市が有名だが、台湾は南北に細長い島。私の小学生時代は台湾バナナが有名だったが、私が2005年3月に台湾旅行に行った時は3月でも既に暑く、半袖で十分だった。そんな台湾は、私が去る2009年11月6日～9日に行った中国の福建省廈門市のすぐ東側に位置している。廈門 (島) は常夏の国で、1、2月は少し涼しいがそれ以外はすべて半袖でオーケーという気候だ。このように、台湾は九州の鹿児島や沖縄よりずっと南に位置しているのだから、そんなところにホントに雪が降るの？

他方、2009年4月からNHKのラジオ講座で中国語の勉強を始めた私は、「雪が降ってきた」という「存現文」の表現が「下雪了 (Xià xuě le)」であることを『NH

Kラジオアンコールまいにち中国語』で勉強したが、本作を観ているとそんな会話が頻繁に登場してくるから何とも嬉しくなってくる。しかし、台湾で存現文としての「下雪了」を経験した人はまずいないのでは？

張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『初恋のきた道』（99年）と並ぶ最も有名な中国映画が『山の郵便配達』（99年）だが、その霍建起（フォ・ジェンチイ）監督がなぜそんなありえない想定をタイトルとした映画をつくったの？本作を鑑賞するについては、まずはそんなところからじっくり考えてみてはどうだろうか。

■□■「小章子怡」と呼ばれる童瑤に注目！■□■

中国は広い、従って人材も多く才能も多彩だ。中国4大女優は、章子怡（チャン・ツイイー）、趙薇（ヴィッキー・チャオ）、徐静蕾（シュー・ジンレイ）、周迅（ジョウ・シュン）の4人。他方、鞏俐（コン・リー）、章子怡に続く「第3の国際女優」が『トゥーヤの結婚』（06年）の余男（ユー・ナン）（『シネマルーム17』379頁参照）。そして第2の章子怡と呼ばれているのが『孔雀 我が家の風景』（05年）（『シネマルーム17』176頁参照）、『セブンソード』（05年）（『シネマルーム17』114頁参照）、『雲南の花嫁』（05年）（『シネマルーム20』182頁参照）の張静初（チャン・チンチュウ）だ。それに続いて今回は、その顔やイメージが章子怡に似ていることから、「小章子怡」というあだ名のついた童瑤（トン・ヤオ）が登場。章子怡を『初恋のきた道』ではじめて観た時は「愛くるしい」という言葉がピッタリだったが、童瑤は正統派美女。映画冒頭から中盤にかけては、声が出なくなったため誰にも行き先を告げずに台北から菁桐（チントン）の町へ一人でやってきた大型新人歌手のメイ（童瑤／トン・ヤオ）という難しい役を映画デビュー作でいきなりやることになったわけだが、さてその演技力は？正統派美女は役柄が限定されるというデメリットもあるが、正統派美女童瑤の今後に注目したい。

■□■モウの生き方は、日本の地方都市の若者のお手本に■□■

『山の郵便配達』はその舞台となった湖南省西部の険しい山々そのものが一方の主人公だったが、霍建起監督がはじめて台湾で撮った本作では、台湾北部の溪谷沿いを走るローカル線の終点、菁桐という小さな町が舞台であり、同時に本作の一方の主人公。日本では小泉構造改革によって中央と地方の格差が生まれ、地方は軒並み地盤沈下し、商店街もシャッター街と化してしまっただけという批判がある。確かに現実はそのとおりだが、それがすべて小泉改革の誤りと直結するものではなく、地方再生の処方箋は別にある。

それはともかく、そんな日本の感覚から言うと、台北から失踪したメイを捜しにやってきた芸能記者のジャック（莫子儀／モー・ズイー）が地元のカフェの看板娘であるウェンディ（紀培慧／テレサ・チー）に対して言うように、菁桐の町は道が狭く曲がりくねっている。菁桐の町は全体として狭く、モウ（陳柏霖／チェン・ボーリン）が住んでいる家

だって「耐火建造物」ではないから、火事になったらイチコロ。したがって日本的な基準では決して良好な市街地とは言えないが、菁桐の町は至って元気だ。

他方、小さい時に母親から捨てられた思い出を持ちながら菁桐の町で



©2009 北京博納影視文化交流有限公司、「台北に舞う雪」製作委員会、博納影視娛樂有限公司

育ったモウは、心優しく働き者の青年でいつもキビキビと動いている。サングラスをかけて一人傷心のまま酔いつぶれているメイをモウが看病してやったところから2人の愛が育まれていくわけだが、そんな関係が築けるのはモウが菁桐の町を愛し、地元に着定して生きているからだ。沈みゆく地方都市に悩む日本の若者たちも、こんなモウのように自分のまちや隣人たちを愛し地元に着定して一生懸命働けば、それだけで地方再生の道筋はついてくるのでは？ 私はそう思っている。そんな意味からは、菁桐に生きるモウの姿は、衰退に悩む日本の地方都市に住む若者たちのいいお手本に！

■□■2曲ともヒットソングらしいが・・・■□■

本作には、終盤のハイライトとなる新年を祝うために設置されたステージ上で声を取り戻したメイが歌う曲と、メイが音楽プロデューサーのレイ（楊祐寧／トニー・ヤン）と過ごした日々を振り返るシーンで流れる曲の2つが印象的。そしてこの2曲とも中国語圏の人々には親しみの深いヒットソングらしい。

中国語を勉強しているお陰で歌詞の一部が聴き取れるのは嬉しい限りだが、私の耳にはこの2曲が「こりやすげらしい」と思えるほどの曲でなかったのが少し残念。

■□■何でも白か黒か？はダメ■□■

弁護士という仕事をしていると、何事も理由は後回しで、まず結論を聞きたくなる習性がある。離婚の相談では特にそれが顕著で、「離婚するの？しないの？」「離婚したいのなら、調停申立てをするの？しないの？」などと白黒をハッキリさせるため結論を迫るわけだ。本作は家が敵同士だったロミオとジュリエットほど相性は悪くないが、田舎の町に住む純朴な青年モウと台湾を代表する若手歌手になろうかというメイの恋愛は、メイが菁桐

の町に逃げ込んでいる間は成立し得ても、声が回復し本格的なレコーディングが可能となればかなり無理。2人は所詮別れていくべき運命だ。誰もがそう思うし、心優しい(優柔不断な?)モウもメイに対して「台北へ行くな!菁桐に残れ!俺の嫁になれ!」と言わな
いから、本作が描く1つの結末は当然。

しかし、霍建起監督は私と違って白か黒かの結論を焦らないから偉い。メイはメイを引き取るために菁桐にやってきた音楽プロデューサーのレイとその敏腕アシスタント、リサ(蔡淑臻/ジャネル・ツァイ)と共に台北に戻って行ったが、さてその後の展開は?ラスト数分間の、「なるほど、これがタイトルの意味か」と納得させられる叙情あふれるシークエンスは、あなたの目でじっくりと。

2009(平成21)年12月8日記

台湾の4つの代表的観光名所のご紹介

2014(平成26)年10月21日記



2014年8月18日 台中の文武廟



2014年8月18日 台中の日月潭



2014年8月18日
台南の鄭成功像



2014年8月20日
台北の忠烈祠の入口